

第4回 海洋観光・ 海を身近に懇談会

(1) 帆船実習からの教育的効果及び練習船を利用したの海事広報について

帆船「海王丸」船長 甲斐 繁利様

(2) 体験活動の重要性と水辺や海での野外教育について

明治大学経営学部教授 星野 敏男様

(3) 意見交換



「帆船実習からの教育的効果及び

練習船を利用しての海事広報」

帆船「海王丸」船長 甲斐 繁利様

※コメント動画は、Facebookにて配信中！

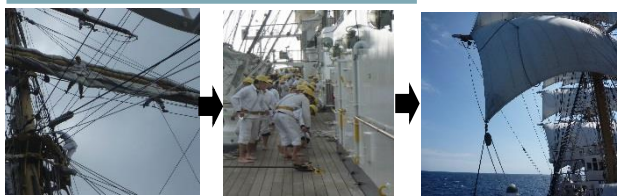
帆船「海王丸」では、年間の訓練航海を4つの期間に分けて実施しています。

その内訳は、4月～6月は遠洋航海（3級海技士免許コース）、7月～9月及び10月～12月コースは国内航海（4級海技士免許コース）、1月～3月は国内航海（3級海技士免許コース）となっており、1月～3月の国内航海の実習を終えた実習生の半数が4月～6月の遠洋航海の実習に参加しています。

遠洋航海の1航路（東京～ハワイ）は、風を受けながら航海するため、直線的な運航ではなく、高気圧の周りを回るため遠回りのコースとなります。基本的に、往路は1ヶ月かけて帆走し、復路はエンジンを使って航海する行程になっています。

帆走の様子については、下記の流れになります。

帆走開始、解帆→展帆→帆走



帆走終了、絞帆→畳帆→機走



帆走中は、まさに自然に囲まれているので、真っ赤な夕日、真っ青な海、様々な形をした雲や島などに出会い、とても人間らしい気持ちになれます。

帆走航海後に実習生に航海の感想を聞いたところ、自然と触れ合うことについての感想がありました。

- ・10ノット以上の速力で走らせる自然の力に感動を受けた。
- ・マストの上から見た360度見渡す限りの海の風景とそこを海王丸だけが帆走する姿を見て感動した。
- ・帆走によって、海や自然を肌で感じる事ができた。

この他にも、団体生活や操帆作業等についての感想がありました。

- ・団体で生活することの楽しさや充実感が感じられ、団体生活を通してチームワークが生まれた。
- ・一人で当直に入ることにより、より責任感を感じた。
- ・高所作業等、無理だと思っていたことができるようになり、自分に自信がわいてきた。

海王丸での海事広報としては、一般公開（船内見学）を年7回程実施しています。この他、岸壁で帆を張る訓練「セールドリル（操帆訓練）」を行い、実習生の訓練の様子と帆を張った船の姿を見ていただいています。

また、海洋教室も実施し、小中学生に実際に船に乗ってもらい、帆を張る作業、船内の見学、船の勉強会などを行っています。

さらに、海王丸には海洋研修生制度があり、一般の方に短期間乗船していただき、船の中での活動や、船内生活を体験してもらうことができます。



「体験活動の重要性と水辺や海での野外教育」

明治大学経営学部教授 星野 敏男様

※コメント動画は、Facebookにて配信中！

野外活動や野外体験を専門としており、青少年の自然体験から得られる教育的効果等について説明させていただきます。

日本各地で様々な体験活動が行われておりますが、野外教育と体験活動の目的については、基本的に「自己との対面や自己成長」、「人や仲間とのコミュニケーション能力の向上」、「自然や社会との関係の改善や育成」の3つがあります。

これらは、様々な観点から研究され効果が実証されており、生きる力や自己概念として「自己の心理側面への効果」、コミュニケーション能力や社会とのかかわりとして「社会的スキルへの効果」、自然に対する認識や環境行動に及ぼすものとして「自然認識にかかわる効果」がそれぞれあります。これらを実際に実証する方法としては、体験実習を行う際に、実習前と後でアンケートデータを取り、実習を行っていないクラスとのデータを比較しています。

体験活動については、子供たちに変化をもたらす要因を判断することは難しいですが、体験活動の教育効果をあげる具体的要因（体験活動の良さ）は、下記のとおりとなっています。

- ① グループでの行動や話し合いがある。
- ② チャレンジし、自分自身と対面する場がある。
- ③ 自然や本物に直に触れる。
- ④ グループや個人を指導できる指導者が介入している。
- ⑤ 規則正しい生活を作る体験がある。

次に、海洋教育についてですが、海洋教育の独自の効果として、「シーマンシップ」という言葉がよく使われますが、これは言語化やデータ化が困難で暗黙知に近い概念、あるいは「意識」の意味を含んだ包括的なものとして考えられます。

海洋教育を世界的に見たら、オーストラリア周辺では、ウォーターワイズ・プログラムといわれる政府公認のプログラムがあり、子供のころから海洋教育がしっかりされていますが、日本ではまだまだ不足していると感じます。

また、1964年の東京オリンピック・パラリンピックの際に補助金が出たこともあり、プールが盛んに作られ、学校でも水泳の授業が取り入れられました。しかし、これが逆に海や川などの本物の自然を体験する場を減らしてしまったと感じています。海や川で泳ぐことと、プールで安全に泳ぐことは意味が違いますので、この点は課題だと思います。

東京海洋大学大学院の千足耕一先生からの引用になりますが、海洋教育を充実していくためには、商船・水産の分野や海辺の体験教育や環境教育に携わる多くの人々がつながり合い、協働して様々な問題を解決していくような組織的な研究体制が重要です。

最後になりますが、教科書で学んだ「海」と、帆船等に乗って体験した「海」は、背後にある言葉の意味が違います。「海」という言葉の背後に広がる文化的、伝統的共通認識の育成に役立つ体験の場である海洋教室や帆船の見学等を、日本の将来を担う子供たちのためにたくさん準備するべきだと思います。

意見交換



会場：海王丸の士官サロン

甲斐船長、星野委員の話、海王丸の船内見学を踏まえての意見交換

(矢ヶ崎委員)

それでは、最初に、甲斐船長、星野委員の話、海王丸の船内見学を踏まえて意見を述べていただきたいと思います。

まずは、なぐも委員からお願い致します。

(なぐも委員)

今回、帆船の船内見学させていただき、率直な感想ですが、私の子供にも体験させてみたいと感じました。

また、船内見学等については、あまり情報が届いていないということもありますが、やはり、船となると見学する上でもハードルが高いと感じられますし、帆船であればなおさら気軽に行きづらいのかと感じました。

最近の子供達は、夏休みの自由研究で何を研究すればよいのか迷っている子供が多いと聞きますので、夏休みの期間で、自由研究と連動させた体験航海があれば多くの子供が参加してくれるきっかけになるのではないかと感じました。

(矢ヶ崎委員)

次に、田久保委員お願い致します。



(田久保委員)

体験することの中で、最も言葉で表現しようとしても表現しづらいものが「セーリング」だと思います。船に乗って、帆に風を受けて走りだすときの瞬間の体験を言葉で表現すると、表現しきれません。しかしながら、一度体験してみるとその良さをもう一度体験したくなります。だからこそ、体験というものは大事であると思います。



投げる・走るといった体験は、日常生活の中にありますが、日常で体験できないものこそ子供達には体験して欲しいです。

また、海洋教育の関係ですが、体験航海といったものは、一度沖に出たら誰も助けてくれないため自立心が身に付きます。また、陸上の人間関係を狭い船内で体験できるため社会性も身に付きますし、様々な面で海での海洋教育は大切だと思います。しかしながら、浜辺や海辺での体験は割とありますが、体験航海といったものを体験する機会は少ないので、観光の一部若しくは国の施策の教育の一部として考えるなど、色々な面で今後考えていかなければなりません。

別の話になりますが、過去に「あこがれ」という大阪市が所有していた体験型の帆船と、「海星（かいせい）」という複数の企業が出資して作られた体験型の帆船がそれぞれあり、多くの方が乗船されました。現在は、残念ながら2隻とも無くなってしまったのですが、今、これらのような帆船を作ろうという動きがありますので紹介させていただきます。

Tall Ship Challenge Nippon (URL : <http://tallshipchallenge.jp/>)

いつの日か近い内に、海洋国家として帆船を作ろうということで、活動していきますので、よろしくお願い致します。

(矢ヶ崎委員)

次に、仁田委員お願い致します。

(仁田委員)



海での体験教育というものは、船に乗って体験したり、島で体験したり様々ありますが、私が関わっている中には、修学旅行生に島で民泊していただき、島の生活を体験していただくというものがあります。これに参加された方々は、たった1泊しただけでも別れ際には、泣かれるほど感動・感激されており、生徒も成長し、受け入れ側の島民の方も楽しまれており、非常に良い体験活動になっています。

このような海や島での体験は、色々な要素があるので、各省庁の施策をあわせて、体験教育を盛り上げていただければと思います。

しかしながら、船を使っでの体験学習というものは、やはりお金がかかるので、国や自治体でも海洋教育を実施する上で、船を所有したり、資金面で支援する等の施策を考えていただき盛り上げていただければと思います。

(矢ヶ崎委員)

次に、守谷委員お願い致します。

(守谷委員)

帆船には、初めて乗らせていただいたのですが、ウィンチが手動だったり、甲板を磨くのにヤシの実を使ったりするなど、今の世の中からすると貴重な船だと驚きました。また、教育が目的だとしても、これだけ多くの人を乗せていく船というのは、客船以外ではかなり珍しいと思います。



帆走を体験するという事は、非常に素晴らしいものであり、乗ってもらわないと分からないと思いますが、船は持ち歩けないので、船に来てもらい体験してもらうという事は大変だと思います。

当社では旅客船会社として、毎日船を運航しており、値段も割と手頃なので、気軽に乗っていただけるのではないかと考えていましたが、全くそのようなことはなく、一度乗っていただくというハードルはきわめて高いと実感しています。

海側から見ると陸側はかなりバリアがあり、現状ではバリアフリーには難しいと感じており、そのバリアは、防災面等での護岸が影響しており、それを平常時と緊急時との使い分けを考えないと今後も変わらないと感じています。

(矢ヶ崎委員)

次に、櫻井次長お願い致します。

(海事局櫻井次長)



海王丸や日本丸が遠洋航海する際には、出港式に出席しご挨拶をさせていただく機会があるのですが、その際に学生に対して、自己と見つめ合い、コミュニケーション能力を高め、自然と向き合い、人間として大きく成長していただくよう話をさせていただいています。

海洋教育は、一般の方々に理解していただくためには、国土交通省だけではなく、政府として考えていかなければならないと感じています。また、海洋国家日本ではありますが、海を眺める世の中になっていますので、このような懇談会を通じて効果的に発信し、今後色々な施策に繋げていかなければならないと感じています。

(矢ヶ崎委員)

ここで、甲斐船長に1点ご質問があります。

星野委員の説明の際に、「シーマンシップ」という言葉がでてきましたが、言葉では説明しづらい点はあると思いますが、船長の考えで、これに連想される言葉があれば教えていただけないでしょうか。

(甲斐船長)

シーマンシップは、それぞれ捉え方が違うかもしれませんが、私個人としては、「安全運航への備え」と考えております。事故等があった時に、物が使えたり、人がすぐに動ける準備などのように備えるということが基本になると思っており、私共も大きな事故を引き起こさないように、日頃から自分を戒めながら備えることにしております。



なお、一般的には、船の航海技術や海上生活における心構えや身のこなしといったことで考えられていると思います。

(矢ヶ崎委員)

個人的に日本人の中で少し不足している感覚や能力があると感じています。

それは先を読む力や自己責任で実行する力であって、甲斐船長の「安全運航への備え」ということに共感を覚えています。

今日は、野外活動が専門であります吉田先生（元筑波大学教授）にもご参加いただいております、折角の機会ですので一言お願いしたいと思っております。



(日本オートキャンプ協会 吉田会長) ※特別参加

本日は、海王丸の極めて近代化された姿に驚きました。しかしながら、最後に操舵室を見学させていただき、少し安心しました。時代が近代化しても、守るものや文化等の原点になるものは大切しなければならないと思っておりますし、そういったものを伝えていくものが教育だと考えています。新しいものだけを教えるのではなく、守ることを教えることも教育です。

最近では、我が国が海洋国家、海洋立国、海洋民族等と表現されますが、メラネシア、ポリネシア、ミクロネシアの島々で暮らす人々と比較すると、到底及ばない海への理解と接触があると思います。また、どちらかといえば、海を忌み嫌い、危険なものとして扱ってきたのが、日本人のスタンスではないかと思っております。振り返れば、鎖国政策が影響しているのかとも思っております。さらに、東日本大震災では輪をかけて海は恐ろしいものというイメージを作ってしまった。これらを払拭するための効果的な方法は、やはり、海の魅力や素晴らしさを伝えることが大切だと感じています。



過去には、昭和 40 年代前半頃までは、臨海学校や林間学校が全国で地域・PTA の連携の元行われておりましたが、システムの変化で、昭和 40 年代中ごろになると、急速に実施されなくなりました。効率化を求める時代の中で、実際上の実習を行うのは難しいですが、海の本物の素晴らしさを子供たちに伝えたいと思っております。

最後になりますが、海は命の母と言われておりますが、漢字では「母」と書かれず、「毎」となっております。個人的には、「母」と書きかえるべきかと思っておりますので、賛同いただければ幸いです。

(矢ヶ崎委員)

吉田先生ありがとうございました。

多くの人に、海を体験していただき、海の魅力を知っていただくために、その第一歩として、何かご意見ありますでしょうか。

(仁田委員)

海外では、子供の頃に色々な体験をさせて適性を見つけるという仕組みがありますが、日本では野球部やサッカー部に入ると、365 日それしかやらないとい

う子供が多いと聞きますので、海外を見習い、子供達に様々な体験ができる仕組みを考えることも必要かと思えます。

(田久保委員)



他の種目から他の種目を体験させることも大事ですが、現代の親は過保護すぎるという点がありますので、まずは親から海の危険性等を体験し理解していただき、子供たちに学んでもらう仕組みも必要なのかと思いました。

また、B&G 財団が実施している海洋体験教室の話になりますが、以前、大型客船「ふじ丸」を使って海洋教室が行われていました。これは、親御さんからも大変評判が良く 30 年以上続き、子供の時に体験した方も自分自身が親になり自身の子供に体験させている方もいらっしゃいました。しかしながら、「ふじ丸」が老朽化等により使えなくなってしまい、他の船での代替も資金面等でできなくなり、その海洋体験教室はなくなってしまったそうです。

やはり、船を使った体験教室を実施する上では、資金不足といった問題があるので、支援等のシステム作りが大事だと思いました。

(矢ヶ崎委員)

その他に、星野委員お願い致します。

(星野委員)

私は、日本全体で子供たちの日常生活をどうするべきか考えるべきだと思います。

また、先程からも話がでていとおりの、教育にはお金がかかってきますので、こちらについても共通認識で考えるべきだと思います。

2020 年には国を挙げたイベントであるオリンピック・パラリンピックもありますので、子供たちの将来をどのようにしていくのか考える良いきっかけになるのかと思っています。



(甲斐船長)

私は、帆走の素晴らしさを多くの人に体験して欲しいと思っていますので、田久保委員から話があった「あこがれ」や「海星」を復活させるという話については、是非実現していただければ素晴らしいと思いますし、また、そこで体験した資質が非常に日本にとっても財産になると思っています。

また、海洋教育を実施する上で、どのようにしたら多くの子供達に参加してもらえるかという点について、海王丸だけでは発信不足なので、全国各地で、発信してくれる方（学校の先生や PTA の方等）に集まっていただけるイベントを計画し、その方々が核となって発信していただき広がっていくことが大事だと感じています。

さらに、先程の星野委員の説明にもありましたが、やはり海に親しむためには指導者が大事であり、このような指導してくれる方を育て増やすことも必要ですし、親から子供へ世代ごとに伝える仕組みができれば良いです。

(なくも委員)



これから親になる世代（20代）をターゲットに絞って、船や海の体験から心を育てる効果をアピールすれば、子供にも教育していただけるのではないのでしょうか。

また、新潟県では、新潟県の観光協会が補助金を出して、中学生に観光ガイドをさせる取り組みがあったのですが、自分の子供がガイドを行っている姿というのは、親としては見たくないので、親を取り組むことプラスで、子供を先に取り込むといった取り組みをすれば、親も自然に集まるのではないかと思いました。

(守谷委員)

まず、船に乗ってもらうことが大事という点で、利用される方の乗りやすい環境整備を作らなければならないと思います。

また、海洋教室の点ですが、子供達の興味関心も世代によって違うので、世代にあった海洋教室を考え見つけることも大事だと感じました。

(海事局櫻井次長)

先程から、親や子供の話が出ておりますが、やはり親が子供に与える影響力は大きいと感じております。母親が船長の格好良い姿を見ることを目的として子供を連れてくるということでも良いと思いますし、何か親と子供を絡めて参加していただき、それにプラスして、夏休みの自由研究などの対象になるものを実施するというのも良いと思いました。

また、日本には各地に海・船・港に関する博物館や美術館がありますが、そこに行くと、それぞれの地域の海との関わりについて学ぶことができます。中々、そういったものが、世間的にあまり知られてないのではないかと思いますので、少しでも海に近い感覚を持ってもらうためにも、このような情報も発信することが大事ではないかと思っております。

(矢ヶ崎委員)

本日も多くの意見をいただきましたので、最後に簡単にまとめさせていただきます。

海に関心を持ってもらい、来てもらい体験してもらうためには、子供たちの生活環境をどのようにしていくかビジョンを想定しながら、横断的に多くの方が考えていき、それと並行して手法や対象等を整理し考える必要があります。



手法としては、観光として行うのか教育として行うのか、或いは両方ということで、観光×教育という新しいプログラムで行うのかというものも考えていけると思います。

成果としては、発信者を増やす。或いは、潜在的に発信者となれる方を掘り起こしていくことも重要だと思います。海に関心がない、怖いなどの抵抗感や無関心を持っている方には、信頼できる人からの信頼ある情報が必要だと思いますので、身近な発信者が自己体験を自分の言葉で語れる発信者を増やすこと。それから、導いてくれる人を増やすということで、リーダーの循環を作ることが必要になってきます。

進めていく上での対象については、子供にするのか、親にするのか、或いは両方セットにするのか、3つの切り口があると思いますが、それぞれ考える必要があります。しかしながら、やはり母親の影響力は大きいので、母親の気持ちを変えることについては、真剣に考えるべきことだと思います。

また、夏休みの自由研究については、海のことを取り上げた子供たちを全国的に表彰するといった制度も考えていけば、さらなる広がりが増えると考えます。

以上、本日も非常に実りがある意見交換会となったことを御礼申し上げます。

